

「金沢の街並み保存と石川県の風景表象・文化 ー 文学と歴史を中心に」

担当教員名 竹本 研史 根崎 光男

コース概要

日程	2018 年 9 月 11 日～14 日
場所	石川県金沢市・輪島市
参加人数	16 名

コースのねらい

おもに文学と歴史学の観点から、(1)まず金沢市の町並み保存やまちづくりを学ぶこと、(2)次に、泉鏡花、徳田秋聲、室生犀星という3人の文豪を輩出した金沢の風景を実際に目の当たりにして、文学作品による表象との異同を確認しながら文字芸術の可能性を問い直すこと、(3)「伝統と暮らし」をテーマとして、金沢とは異なる能登半島の自然と文化を学ぶことが目的です。

内容

初日は、金沢の三大文豪である泉鏡花、徳田秋聲らの作品舞台となった、浅野川流域を散策し、事前学習で分析した文学作品による表象と、自分たちが目にしている風景との差異について検討することによって理解を深めました。金沢の代表的な観光スポットでもある「ひがし茶屋街」では、1820年の創業以来、そのままの形を残す「志摩」でスタッフの方から茶屋についての解説をいただきました。徳田秋聲記念館では、学芸員の方に、徳田秋聲とその文学作品の全体像、ならびに文学館が抱える課題についてレクチャーしていただきました。



1820年創業以来、そのままのかたちで残されている、ひがし茶屋街のお茶屋「志摩」。従業員の方からお茶屋文化についての話を伺いました。

2日目は、能登半島の「伝統と暮らし」の文化をテーマに、輪島市で石川県漆芸美術館、白米千枚田、輪島製塩を訪れました。漆芸美術館では学芸員の方から漆芸の歴史や工法を学ぶとともに、伝統継承の困難さを伺いました。白米千枚田では、海に望む圧倒的な景観に驚嘆しながらも、その背後に隠れる農業の持続可能性をめぐる問題を確認しました。輪島製塩では、浜士の方から伝統的な揚浜式塩田と塩づくりについて学習しながら、併せて塩害などの諸問題について説明を受けました。



揚浜式塩田で海水を塩田に撒く体験をする学生

3日目の午前中は、「金澤町家研究会」のお二方の案内で金沢町家が数多く残る地域を歩きました。金沢町家の構造、保存方法、そして現代生活と保存の両立の取り組みを学びました。午後は、初日で歩いた浅野川流域と比較しながら、室生犀星、吉田健一らの作品舞台となった犀川流域を散策しました。妙立寺のスタッフに導かれて建物内をめぐりながら、吉田健一『金沢』において、主人公が幻想への入り口として妙立寺が描かれる必然性を実感したり、室生犀星記念館や「にし茶屋街」では、ガイドさんから室生犀星の人物像や芭蕉をはじめとする文学者などについてお話を伺ったりしました。



「金澤町家研究会」の代表の方に解説をいただきながら、町家を見学。

4日目は、吉田健一『金沢』の舞台である成巽閣と、多くの文人たちに愛された兼六園を訪れました。成巽閣では、建築構造とマリンプルーの群青の間に目を見張りながら、吉田がそこに見出した「西洋」について考察をめぐらしました。兼六園では、文人たちが取り上げた場所を中心に回りながら、それぞれの作品の描写をそれらに重ねました。

レポート課題として、学生たちが毎日つけていた「振り返りシート」に記された記録に基づき、改めて金沢・能登の伝統と暮らし、そして文学の現状と課題について考察し、事後学習では、各人のレポートを基にして、教員からの問題提起も含めて活発な議論がなされました。

学習を終えて

今回私は金沢市・輪島市を舞台にしたフィールドスタディに参加させて頂きました。数多くの文学作品のモデルにもなった石川県の雄大な自然や現在まで受け継がれてきた伝統を実際に自分の目で見られたことは大きな財産になったと思います。また、濃密な事前学習や事後学習があったことで観光旅行では決して分からない地域の現状や課題に向き合うことができました。人間環境学部の子としてどう取り組むのかを考えさせられた夏でした（1年 大塚 朱莉）。

普段はただ何気なく美しさや面白さだけを見て終わってしまうような観光地の裏で、どのような人がどのような悩みを持って、それを改善しようとなさっているのかを知れてよかったと思います。

また、文豪と呼ばれる人が作品として残した風景を実際に見てみて、その作品やその人に思いを馳せたり、作品と実際の風景の違いについて見てみたりするという、新たな風景の楽しみ方を模索できたことも興味深かったです（3年 河合 来望）。